島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第23巻－第２号　13頁～18頁　平成元年12月

赤ちゃんイメージ（Ⅰ）

猪野　郁子*・多田　學**・福沢　陽一郎**・岡崎　美代子**

Ikuko INO, Manabu TADA, Youitiro FUKUZAWA and Miyoko OKAZAKI

Baby Image (Ⅰ)

1．はじめに

現代の母親の育児行動について，様々な疑問が投げかけられている。

その１つに，「母性」が十分に育っていないのではないか，「母性」を育てえない環境に置かれているのではないか，ということがある。

「母性」とは，大日向に言わせれば，母親意識・感情である。[1]つまり，「母親らしい行動」がとれる，「母親らしい愛」が注げるということ。一般に「母性本能」とか「母性愛」と言われるもの，ということになろうか。

この「母性」は，従来，女性には産まれつき備わったもの，本能的なものと考えられてきた。しかし，文化人類学，心理学，精神分析学等の分野での研究がすすむにつれ，「母性は形成されるもの」－母親意識や感情は，妊娠・出産その後の育児を通じて，母親の中に芽ばえ成長していくものであるという考え方にきている。

守屋慶子は，心理学の立場から「母性」は，子が母の体の一部である妊娠期から別個の物体となってもまだその状態が持続されている乳児期初期の「生理的母性」から出発して，母親に生活の多くを依存しながらも別個の心理を現わす「生理的－心理的母性」，第一反抗期のように自我を芽ばえさせる「心理的－生理的母性」を通って，「心理的母性」「人間的母性」へと高めていき完成するとしている。[2]

そして，このような「母性」の発達に，母親自身が精神的に成熟しているかということと共に，父親が夫として妻(母親)の中にどう位置づいているかが大きく関わっていると述べている。

＊ 島根大学教育学部家政研究室
＊＊ 島根医科大学環境保健学研究室

フランスの児童精神科医であり精神分析医であるレボヴィシ（Lebovici, S.）は，「母性」の形成には３つの過程があるとしている。[3]

第一の過程は，その女性が乳幼児期に自分の両親との関係をどう認識していたのか。自分の母親とどのような関係をもっていたのか。第二の過程は，異性である父親とどのような情緒関係をもってきたのか。第三の過程は，どのような夫を選び，その夫の子どもを産みたいと思ったのか。

平井信義は，彼らのいくつかの研究から，「母性」の発達には，その女性の乳幼児期の母子関係がどうであったか(特に，身体的接触が十分であったか)。思春期以後，幼い子どもに対して関心や親しみの感情を持ったことがあるか。又，幼い子どもの世話を経験したことがあるか。自分の母親に対してどのようなイメージを持っているのか。わが子を持ちたいと望んでいるか。子ども好きの性格（自己中心的でないか）等が大きく関与しているとしている。[4]

母性を正常に発達しえない母親，母性のはたらきを十分に発揮できない母親たちを慶応大学精神神経科では母性拒否症候群（maternal rejection syndrome）と名づけている。つまり，子ども側から言えば，母性剝奪症候群（母性喪失，母性剝奪）(maternal deprivation)である。

この「母性拒否」には，大別して３つの徴候がある。１つは，虐待・遺棄。２つめは，心中（養育拒否）。３つめは，産後抑うつ症（マタニティ・ブルー等）である。いずれの徴候も，最近増加傾向にあるという。[5]

こうしたことに対して，様々な試みがなされている。

胎児研究もその１つである。胎児が母の胎内で母親や父親の声を聞いており，母親の感情によって胎児の動きがことなる等，胎児の能力の解明は，母親や父親が直接見聞きできないけれど，十分母親（間接的に父親とも）

と交渉が持てることを教えている。しかし，見えない者に対しての感情は育てにくい。それ故，分娩直後の赤ん坊を分娩台の母親に抱かせることによって，「わが子」への愛しさを育てようとしている。へその緒のついたわが子がわが乳房に吸い着く様をみて感動しない母親は少ないであろう。

母親教室，父親教室，両親教室あるいは「親業」講座等もにぎやかである。

こうした教室や講座が開設されるのは，親や親子関係のモデルとして，わが親，わが親子関係しかないという貧しさが関係している。又，子ども達の縦の関係のみられない生活(兄弟姉妹数の減少,遊び仲間や遊びの変化)は,子どもの育つ道すじを見聞きする体験を奪っている。

平井が指摘するように，思春期以後，幼い子どもへの感情を育て触れる経験をさせる機会が必要となる。

中学校3年家庭科保育領域で，男女中学生が幼稚園・保育所を訪問し，短い時間であれ幼児に触れ，ともに遊ぶ体験は，男子生徒にも大変好評だという。

今後は，母性や父性の発達のためにこうした体験を意図的に教育プログラムに組みこんでいく必要があろう。

さて，我々は，経験・体験・学習などを通して，人や物に対してあるイメージを持っている。このイメージは，勿論，新たな経験や学習あるいは周囲の人々の考えなどによって修正されるものである。

思いこんでいるというか,取得したイメージをもとに,ある人（物）に接した場合，実際とのギャップが大きかろうと少なかろうと，なんらかの影響が生じるのではないかと考える。

例えば,「赤ちゃん」に対して，丸々と太って笑っている姿を思い浮かべ,「かわいい」「ほおずりしたい」とか「甘ずっぱい」と，どちらかと言えば，良いイメージを抱いていたとする。こうした人が，わが子であれ，他人の子であれ,実際に赤ん坊の世話を始めてみると,泣き,ぐずり，よだれを出し，意志が通じずてこずる等を経験すると，どう変わるのであろうか。

特に，初めての子どもの場合，病気がちの子ども，寝つき寝起きの悪い子ども，疳をおこしやすい子ども等扱いにくい子どもの場合，母親側の感情が安定しにくく，持っていたイメージとのギャップ（こんな筈ではなかった）という思いに支配され，ますます子どもへの感情を悪くさせ，子どもとの関係も悪くしていくことがあるのではないだろうか。

勿論，逆の場合も考えられる。子どもとは扱いにくく世話が大変だと思っていたのが，よく眠り，乳の飲みもよく機嫌も良い扱いやすい赤ちゃんだったとすれば，当然，母親はイメージを修正し，赤ちゃんに対して良い感情・関係を育てるであろう。

子どもの状態は固定した永続的なものではなく，母親は子どもの状態にあわせていつも揺れ動いていると考えられる。又，母親の性格－思い込みが強い程育児への影響も大きいのではないかと考えられる。

そこで，1．母性や父性を健全に育てるために，親予備軍にある青年期からどのような経験や教育が必要であるのか。青年期思春期にどのような学習をさせるのか。2．赤ちゃんに対するイメージは，思春期青年期から妊娠・出産を通してどのように変化するのか。3．そのイメージは，自分の母親との関係や幼い子どもとの触れあい体験とどう関わっているのか。4．そのイメージはわが子の育児にどのように影響するのか。の4点を明らかにする目的で本研究に着手した。

本報告においては，青年期から妊娠・出産を通して赤ちゃんイメージがどう変化するか。という点と，幼い子どもとの触れあい体験がどう関わっているか。という点について述べる。

2．方　　法

質問紙法によった。質問項目は，家族構成，幼い子どもとの触れあい体験の有無等を求めるものと，赤ちゃんに対して考えられるイメージの中から,好意的(プラス)イメージとして「いとしい」「愛らしい」「やわらかい」「まるい」「やすらか」「よく寝る」の6語を，反好意的（マイナス）イメージとして「手間がかかる」「病気になりやすい」「かよわい」「こわれそう」「よだれが出て汚い」「よく泣く」の6語を選び，これらの語について,「とてもそう思う」「ややそう思う」「ふつう」「ややそう思わない」「全くそう思わない」の5段階評価を求め，これを「とてもそう思う」を5点とし,「全くそう思わない」を1点とする5点法で集計を行った。

対象は,高校2年生女子142人,大学3，4年生女子137人，妊婦（初めての）132人，初産婦71人である。高校生は，ロングホームルームの時間に担任の手によって，大学生と産婦（乳児健診に来院した生後1か月から1年半の乳児をもつ母親）には，直接手渡し法で，妊婦には窓口での配布回収法によって実施した。

昭和60年と63年の7月～11月にかけて行われた。

表1　対象者の年齢・家族構成・職業の有無

( )内%

	年齢					家族構成		職業	
	20歳以下	21～25	26～30	31～35	36歳以上	核	拡大	有	無
妊婦 132人	1(1)	37(28)	73(55)	17(13)	4(3)	74(56)	57(43)	64(48)	68(51)
産婦 71人	2(3)	21(30)	38(54)	9(13)	1(1)	45(63)	26(37)	16(23)	55(77)

3. 結果及び考察

a. 対　象　者

妊婦・産婦の年齢・家族構成・職業有無についてみた。表1に示すように，初めての妊娠・出産をする者は，8割強が20代であるといえる。それも後半である。対象者の来院する産院病院を松江市内に限ったので，対象者は松江市内とその近在に在住する者である。それ故，核家族（夫婦のみ）が半数強を占めている。職業（自営も含めて）を持っている者は，妊婦48%，産婦23%である。産婦の割合が減少するのは，出産退職の形をとる者がやはり多いということであろうか。

b. 赤ちゃんに触れた経験

赤ちゃんと遊んだり，赤ちゃんにミルクを与えたりなどの赤ちゃんに触れた経験のある者はどれ位いるであろうか。妊婦・産婦には，結婚前にこうした経験があったかどうかをたずねた。表2に示すように，平均して8割の者が経験があるとしている。特に高校生・妊婦の割合は9割と高い。

経験者の大半は，親戚の子ども（甥や姪など）に触れた経験である。高校生や大学生の中には，近所の赤ちゃん，実習に出かけた保育所や乳児院の赤ちゃんをあげている者もいる。

意外に多くの人が，結婚までに赤ちゃんとの接触を持っていることがうかがえる。

表2　幼い子どもに触れた経験の有無

( )内%

	ある	ない
高校生	130(92)	12(8)
大学生	103(75)	34(25)
妊婦	117(89)	15(11)
産婦	44(62)	27(38)

c. 赤ちゃんイメージ

イメージ語としてあげた12語について，どのような評価をしているか年齢別にみたのが表3である。

最も高い評価－「赤ちゃんとは～だ」と肯定されたイメージ語は「愛らしい」である。反対に「最も～でない」と評価されたイメージ語は「きたない」である。この「きたない」という語には，「よだれが出て」という修飾語がついている。

好意的イメージについて，4グループの中で最も高い評価をしているのは初妊婦であり，反対に低いグループは初産婦である。

反好意的イメージについては，高校生・大学生・初妊婦の間には差がなくほとんど同程度の評価であるのに対し，初産婦がこの三者と比べて有意に低い評価をしている。つまり，反好意的イメージについて否定(それ程「～ではない」と思っている）している。

初妊婦の好意的イメージが高く，反好意的イメージも高いのは，わが胎内で育ちつつあるまだ見ぬわが子への期待と不安の現われとみれよう。

これと対照的な初産婦は，もうすでに，わが子と対面しつつ育児を行っている。それ故，思い描いていた程，赤ん坊は丸々とはしていないこと。手ごたえのない柔らかさでもないこと。又，一日のほとんどを眠っていると思っていたのが意外に起きていること等を実感し，その想いが評価に反映されていると考えられる。

年齢が若い程－結婚も出産もまだ夢のことである時期には，「赤ちゃん」へのイメージは，どちらかといえば観念的であるため，「いとしい」「愛らしい」というイメージに対して評価が低くなるのであろう。反面，「赤ちゃんは一日の大半を眠っている」とか「病気にかかりやすい」とか「赤ちゃんはよく泣く」等の知識がイメージに影響を与えているようである。

妊娠し出産し育児を始めるに従い，「いとしさ」「愛らしさ」が増し，経験・体験を重ねることにより，「知識（思いこみ）」によってふくらまされていた不安が徐々に解消されると言えよう。

d. 赤ちゃんに触れた経験別イメージ

次に，結婚・出産前に赤ちゃんと遊んだり，ミルクを与えるなどの簡単な世話の経験がイメージにどのように

表3　イメージ得点

	高校生	大学生	初妊婦	初産婦	全体
いとしい	3.59±1.00	4.12±0.95	4.70±0.60	4.73±0.65	4.22±0.97
やわらか	4.23±0.91	4.54±0.80	4.75±0.51	4.42±0.87	4.49±0.80
よく寝る	4.53±0.78	4.25±0.84	4.30±0.79	3.19±1.00	4.19±0.94
まるい	3.92±0.98	3.99±0.96	3.99±0.82	3.29±1.08	3.86±0.98
やすらか	3.86±1.05	3.73±1.07	4.31±0.65	3.81±0.97	3.94±0.98
愛らしい	4.50±0.89	4.44±0.85	4.92±0.29	4.78±0.58	4.64±0.74
プラスイメージ合計	4.11±1.00	4.18±0.95	4.50±0.71	4.04±1.09	4.22±0.95
手間がかかる	3.94±1.07	4.22±0.82	4.03±0.86	4.29±1.01	4.09±0.95
病気になりやすい	3.85±0.95	3.69±0.93	3.93±0.82	3.18±1.16	3.73±0.98
かよわい	4.04±1.02	3.73±0.98	4.18±0.90	3.11±1.16	3.85±1.06
こわれそう	3.54±1.28	3.56±1.02	4.02±0.99	2.94±1.16	3.59±1.16
きたない	2.01±1.08	2.61±1.09	1.47±0.84	1.61±1.00	1.97±1.10
よく泣く	4.34±0.76	4.08±0.83	3.87±0.94	3.45±0.92	4.01±0.90
マイナスイメージ合計	3.62±1.28	3.65±1.08	3.58±1.30	3.10±1.33	3.54±1.25

*　$t>1.960$　$p<0.05$　$df=\infty$
**　$t>2.576$　$p<0.01$
***　$t>3.291$　$p<0.001$

表4　赤ちゃんに触れた経験有無別イメージ得点

	高校生			大学生			初妊婦			初産婦			全体		
	有	無	t	有	無	t	有	無	t	有	無	t	有	無	t
いとしい	3.60 ±0.97	3.50 ±1.31		4.16 ±0.91	4.00 ±1.04		4.75 ±0.50	4.60 ±0.50		4.75 ±0.61	4.70 ±0.72		4.20 ±0.94	4.25 ±1.00	
やわらか	4.23 ±0.88	4.25 ±1.21		4.55 ±0.80	4.50 ±0.82		4.79 ±0.44	4.46 ±0.83	**	4.38 ±0.89	4.48 ±0.84		4.50 ±0.78	4.45 ±0.88	
よく寝る	4.52 ±0.80	4.66 ±0.49		4.22 ±0.86	4.35 ±0.77		4.32 ±0.77	4.13 ±0.91		3.34 ±0.91	2.96 ±1.12		4.25 ±0.89	3.93 ±1.10	**
まるい	3.93 ±0.97	3.83 ±1.19		4.08 ±0.95	3.70 ±0.97	*	3.94 ±0.82	4.35 ±0.74		3.22 ±0.98	3.40 ±1.24		3.89 ±0.95	3.73 ±1.09	
やすらか	3.84 ±1.06	4.08 ±0.90		3.84 ±1.04	3.41 ±1.10	*	4.32 ±0.65	4.26 ±0.70		3.84 ±0.86	3.77 ±1.15		3.98 ±0.95	3.76 ±1.07	
愛らしい	4.51 ±0.86	4.41 ±1.24		4.52 ±0.71	4.20 ±1.17		4.93 ±0.28	4.86 ±0.35		4.83 ±0.53	4.77 ±0.57		4.67 ±0.68	4.52 ±0.95	
プラスイメージ合計	4.10 ±0.99	4.12 ±1.12		4.23 ±0.92	4.02 ±1.05	**	4.51 ±0.70	4.44 ±0.72		4.05 ±1.03	4.01 ±1.18		4.25 ±0.91	4.11 ±1.06	***
手間がかかる	3.89 ±1.00	4.50 ±0.52		4.21 ±0.83	4.26 ±0.79		4.00 ±0.83	4.26 ±1.09		4.15 ±1.07	4.51 ±0.89		4.03 ±0.96	4.37 ±0.84	***
病気になりやすい	3.84 ±0.96	4.00 ±0.95		3.71 ±0.92	3.61 ±0.98		3.91 ±0.81	4.13 ±0.19		3.20 ±1.11	3.14 ±1.26		3.76 ±0.94	3.61 ±1.10	
かよわい	4.05 ±0.99	3.91 ±1.31		3.75 ±0.99	3.66 ±0.95		4.17 ±0.91	4.20 ±0.86		3.11 ±1.12	3.11 ±1.25		3.90 ±1.03	3.62 ±1.14	*
こわれそう	3.52 ±1.28	3.83 ±1.33		3.59 ±1.01	3.48 ±1.03		4.01 ±1.00	4.06 ±0.96		2.90 ±1.08	3.00 ±1.30		3.62 ±1.15	3.48 ±1.19	
汚ない	2.00 ±1.11	2.16 ±0.71		2.55 ±1.11	2.79 ±1.03		1.40 ±0.77	2.06 ±1.09	**	1.56 ±1.02	1.70 ±0.99		1.91 ±1.10	2.25 ±1.08	**
よく泣く	4.36 ±0.75	4.08 ±0.79		4.02 ±0.83	4.23 ±0.81		3.83 ±0.96	4.20 ±0.67		3.38 ±0.94	3.55 ±0.89		4.01 ±0.91	4.00 ±0.85	
マイナスイメージ合計	3.61 ±1.29	3.75 ±1.20		3.64 ±1.09	3.67 ±1.05		3.55 ±1.31	3.82 ±1.21		3.05 ±1.30	3.17 ±1.37		3.54 ±1.26	3.55 ±1.23	

*　$p<0.05$
**　$p<0.01$
***$p<0.001$

影響しているかみた。結果は表4である。

経験群と非経験群の間で有意な差のみられた項目は，「よく寝る」「手間がかかる」「かよわい」「きたない」の4項目と，好意的イメージであった。つまり，経験群は非経験群より赤ちゃんに対して好意的であり，中でも「よくねむる」とイメージしている。又，少々「かよわい」が，そう「手間もかからない」し「きたなく」ないとイメージしていると言えよう。

大学生と初妊婦で，2，3の項目で有意差がみられたが，おおむね全般的傾向と同傾向と言える。

すでに述べたように，経験群が8割と多いこと。経験の程度を明らかにしていないことが関係しているのではなかろうか。

イメージ化に経験の程度がどのように影響するのであろうか。

「直感」とか「第一印象」とも言われるように，経験の回数や深さは必ずしも関係しないとも言える。しかし，一般に，我々は経験(体験)を重ねることにより，イメージをより確かにしていくのではなかろうか。

それ故，同じ触れた経験といっても，アメリカの高校生のように，ベビーシッターとしての経験ーいろいろな世話の経験，何人もの赤ちゃんの世話の経験等に比べて，責任のない単なる遊び相手等の触れあいでは，かなり質的なちがいがみられるように思われる。

どの程度（質）の触れあいが必要か，を検討せねばならないであろう。

4．まとめと課題

思春期・青年期・妊娠・出産と時間が経過するに従い

赤ちゃんのイメージがどのように変わるのか。赤ちゃんに触れた経験のある者とない者でイメージに違いがあるのか。という2つの目的を明らかにするために，高校生，大学生，初妊婦，初産婦を対象に調査を実施した。

その結果，次のことが明らかとなった。

(1) 結婚までに赤ちゃんに触れたことのある者は8割近くいる。特に，高校生と妊婦の割合は9割と高い。

(2) 好意的イメージ語の中で，「愛らしい」の評価が最も高い。

(3) 反好意的イメージ語の中では，「きたない」が最も低い。

(4) 初妊婦は，好意的イメージで4群中最も高い評価をし，初産婦は，最も低い評価をしている。

(5) 反好意的イメージでは，初産婦が他3群より有意に低い評価をしている。

(6) 妊婦・出産・育児を通して，「いとしさ」「愛らしさ」が増し，反好意的イメージ－赤ちゃんへの不安が解消するといえる。

(7) 経験群と非経験群では，どちらかと言えば，経験群の方が赤ちゃんに好意的であり，不安も小さい。

以上である。

今後研究をすすめていく上で，いくつか解決しなければならない課題が提供されている。

その一つは，イメージ語の検討である。我々がある物（人）に対して，知覚したもの，感情としてのもの，知識としてもっているもの等あらゆることを総合して一つの像を作っているとするなら，より適確な「言葉」を選ばねばなるまい。

二つめは，母性や父性を発達させるために，意図的な経験（体験）を教育プログラムに取り入れるとするならば，どの程度の経験（赤ちゃんとの関係）が必要かの検討である。

さらに，上田や新道らの指摘する，母性の発達に自分の母親との関係（特に愛着をもっているか否か）と母親自身がどのように育ってきたか，[6][7]という要因との関係についての考察。加えて，出産後の育児への影響についての考察も行わねばならない。

そのためには，対象者の層と幅を広げていくことも必要である。

本報告は，日本家政学会第38回大会において口頭発表したものに，昭和63年度の調査資料を加えて考察を行ったものである。

昭和60年調査には，国政貴枝氏の協力を得た。又，昭和63年度調査には，内地留学先の島根医科大学環境保健学教室多田學教授以下スタッフの皆さま方のご指導ご助言を得た。調査に協力いただいた方々も含めて，ここに謝意を表します。

文　　献

1) 大日向雅美；母性の研究，川島書店，(1988)
2) 守屋慶子；母性および母性的なもの，発達12，ミネルヴァ書房，1－15，(1982)
3) 深津千津子；母性拒否症候群の治療，別冊発達9，ミネルヴァ書房，192－193，(1989)
4) 平井信義；母性愛の研究，同文書院，(1976)
5) 深津千津子；前掲書3，189－192
6) 上田礼子；産褥期の母親の潜在的問題(Ⅰ)，母性衛生，25，378－382，(1984)
7) 新道幸恵他；産褥早期の褥婦の母性意識に関与する因子について，母性衛生，26，208－213，(1985)